

人でなくプロであるため、質草の値踏みを誤ると貸付元金を割り込むことになりかねない。また、質屋に持ち込まれる物は広範であり、特にブランド品や美術品は常に偽物のリスクがある。最近、主流となっているブランド品のバッグなどは種類も多く、それに相応する偽物が作られているため、鑑定眼を養うのは容易ではない。

「毎年、新しいものが出るたびに勉強しています。ブランド品も流行に影響されるため、相場感を養うことも必要ですね。流行から外れれば、当然、売れなくなります。だから、メーカーのほうも次々と新商品を出してくるんです。初めての物はこちらも予備知識がなければ、高く値を付けて失敗することもあります。何しろ、騙そうとやってくる詐欺集団もあるんですから。困っている人を装って、新商品を持ってこられたら、『あっ、やっちゃった!』なんてことになりかねません」

偽物かどうかは、日々の勉強で見抜くことができるとしても、本物の盗品の場合は質草だけを見ては対処のしようがない。質屋営業法では、盗品の場合は被害者に対し、無償で盗品を返還しなくてはならないこととしているため、損害は大きい。

「人も見なければならぬというのですが、こればかりは修業時代には分かりません。長年やっ

ている二代目の父は『何かおかしいぞ』と指摘することがありました。盗んだ本人が代理人を使うなど、巧妙化していますから、見分けるのは簡単ではないですね。僕も9年目になってようやく分かるようになってきました。経験しかありません」

●人の役に立つ伝統ある仕事を継ぐ

江黒質店は、戦後、祖父の江黒忠吉氏が浅草の露天商から始め、昭和42年に現在の場所（松戸市五香駅前）で営業を開始した。三代目の元泰氏は、獨協大学経済学部に入學するまでは後を継ぐ意志はなかったと言う。

「質屋にいいイメージがなかったんです。それが大学に入ってから変わりました。旅行が好きでバイクにテントや寝袋を積んでよく一人旅をしていました。地方に行ったときに人の人情に触れることがあって、人のためになる仕事をしようと思うようになりました。そう考えると、質屋は人のためになっているんですね。たまたま、大学に質屋の研究をしている教授がいらっしゃって、そのゼミで質屋の研究をするなかで、家業を継ぐ意志を固めました。伝統ある職業をなくしたくないという気持ちも強かったですね」

平成14年3月、卒業と同時に池袋の質店に修業に入った。

「正直、恵まれていました。普通、大きなお店だと、買い取り部



質店のカウンター。地域密着のお店として、多くの地域住民が訪れている

門や販売部門など、今、主流になっている特定の部門だけで修業を終えてしまうことが少なくありません。僕の場合、いろんな仕事に携わらせてもらえました。社長がよく現場に出ていたことも大きかったと思います。直接、あれこれ指導を受けるわけではありませんが、仕事ぶりを直に見て勉強することができました」

元泰氏は、丁稚の3年を終え、4年目のお礼奉公を経て家業に入るつもりだったが、社長に引き止められてさらに1年、留まった。5年間に値踏みしたブランド品、貴金属はおびただしい数に上る。

「宝石は場所が池袋だけあって扱う数が多いんです。ブランド品についても知識は全くなかったんですが、ヴィトンだけでも年間で数千個は扱いました。おかげで、遠くから一瞥しても真贋は分かります。ここを見るという決まりがあるのではなく、数を見てきた経験で判断できるんです」

家業に入ると、1年間かけて宝